

巻頭エッセイ

情報過多

山本 光正

○

今更言うまでもなく江戸時代には社寺参詣を始めとする楽しみとしての旅が盛んに行われた。それに伴い多数の旅行案内書＝道中案内や観光地案内が出版された。冊子仕立の立派なものから一枚刷りのものまで。中にはあまりに多数刷り過ぎて文字がよく読めないものまである。

多数出版された道中案内の中からここでは絵地図形式の東海道の道中案内を幾つか見てみよう。

○

道中案内の中で最も多く出版された街道は東海道である。改めて説明するまでもないだろうが、交通量の多さは日本で一番であったろう。絵地図の東海道案内もかなり出版されたが、それは多くの旅人が東海道を通ったという以外に東海道の風景が大きな意味を持っていた。東海道は風景にも恵まれた街道であった。

東海道の風景を簡単に述べておこう。江戸を出ると左に江戸内湾を望みながらの旅である。神奈川宿の台町に至ると高台から遙かに江戸内湾を見下ろし、行く手には富士が。三浦半島を過ぎれば相模灘。江戸内湾とは異なり果てしない海が広がり荒々しい波が打ち寄せる。そして江戸の住人には馴染みの大山が右に。小田原からは海を背にして箱根の登り。場所によっては振り返れば大海原を見渡す。ようよう登りきった箱根の山上には芦ノ湖が広がり、富士の眺めは一層美しさを増す。三島・沼津辺りからは駿河湾を左に、より一層大きくなった富士を右手に。薩埵峠を登る頃は既に富士を背負っての旅であるが、振り返った時の富士には思わず驚かされる。駿河路は東海道中一・二を争う景勝の地である。

駿府を過ぎると海から離れて山路に入るが、宇津ノ谷峠は「伊勢物語」東下りの段の蔦・紅葉、そして都への文を託すところ。歌詠み・文人には憧れの地である。大井川は難所ではあるが、旅が無事終われば懐かしい思い出の地となる。川を超えれば小夜の中山。ここも歌と伝承の地であり、一休みして名物館の餅を一口。海から遠ざかっていた道は舞阪で浜名湖を渡ることになる。ここは古くは浜名の橋で知られた名所であった。新居・白須賀を過ぎれば歌枕高師の山。左手には遠州灘の波が打ち寄せる。

二川辺りからはこれまでの感動を静める道を行くが、池鯉鮒の宿の手前にはこれまた「伊勢物語」の八橋・杜若。業平はここで櫛を口にしつつ涙する。それなら都に帰ればよいものを。このあたりからは名古屋城の金の鯨鉦もチラリと見えるようになる。宮から桑名までは海上七里の渡し。ここで又海の景色を堪能する。桑名からは鈴鹿の山中へ。東海道は海とは別れを告げる。鈴鹿山中も多くの伝承に富むところ。風景もまた絵にも描けない筆捨山。山中の景色にも飽きる頃眼前に広がるのが琵琶湖である。多くの日本人は風景の中に大きく広がる水の景色、海そして湖・川を求めるが、東海道は海と湖・川が実にバランス良く配されている。大津を過ぎればこれまた蟬丸、そして逢坂の関跡が旅人を迎え、京へと誘ってくれる。

景色と文学・美術に溢れた東海道は多くの人の憧れの街道でもあった。そのため東海道の案内書、特に絵地図形式の案内は旅のためだけではなく、机上で楽しむものとしても買い求められたのである。



数ある絵地図の東海道図の中からその幾つかを紹介しよう。東海道絵図といえば『東海道分間絵図』である。本図は遠近道印こと藤井半知が作成した東海道図をもとに菱川師宣が描いたもので、元禄3年（1690）に出版されている。絵地図というより東海道絵巻という方がよいだろう。注文に依って紙質を選ぶことができ、彩色もしたようである。まさに一幅の絵巻である。

その後宝暦2年（1725）に折本仕立の『新板東海道分間絵図』が出版された。本絵図は『東海道分間絵図』の剽窃版、下品な言い方をすればパクリ本である。『東海道分間絵図』は懐に入れるには大きすぎ、東海道だけを描いたものであった。これに対し『新板…』のほうはサイズを小さくし、例えば鎌倉道・大山道・伊勢参宮道等を描き入れ道中案内としての利便性を充実させた。当然絵画的価値は下がってしまったが便利であったため何度も版を重ねている。

幕末、万延元年（1860）には鳥瞰図作者として知られる歌川貞秀が『東海道写真五十三次勝景』を作成出版している（図1）。折本仕立本で色刷り。東海道を太平洋上から気球にでも乗って眺めたように描かれている。本図は『東海道分間絵図』に勝るとも劣らないもので、この絵図を見るものはたちまちにして絵図の中の人物になりきり、東海道の旅人になってしまうことだろう。



図1 『東海道写真五十三次勝景』

『東海道写真…』は明治2年（1869）に再版されている。これほどの絵図であるから価格は高くとも多くの人が求めたのではないと思われるが、発行部数は少なかったようで、現在古書市場に出ることは少ない。その理由は時代的背景である。明治2年に再版されるが、内容は初版のままである。そのため本絵図には近代・文明開化の様子は描かれていない。さらに数年後には新橋～横浜間に鉄道が開通する。海に浮かぶのは帆かけ舟。黒い煙を吐く蒸気船の姿は無い。本絵図は当時の人々にとって古臭いものになってしまったのである。

古くても「味がある」「版画の美しさが素晴らしいのに」と思うのは後世の人の目である。近代に入ると出版物の挿絵は版画から銅版画・石版画そして写真へと移行していく。写真といっ

でも不鮮明で現代人からみれば版画の方が余程素晴らしい。しかし当時の人々は写真に時代の最先端を見ていたのだろう。勿論出版する側の事情も考慮しなければならないが。

大正に出版された『東海道パノラマ地図』を取り上げておこう(図2)。清水吉康の作で金尾文淵堂から大正10年に出版されている。折本仕立でカラー印刷である。東海道は勿論鉄道の東海道線である。本絵図は明らかに菱川師宣・歌川貞秀の影響をうけたものであり、清水自身それを引継いだという思いがあっただろう。清水はこのほかに日本各地の鉄道路線鳥瞰図を発刊する予定であったが、『東京付近パノラマ地図』『近畿地方パノラマ地図』『山陽道パノラマ地図』のみが出版された。車中でも机上でも楽しめるものであったが、これ以降本絵図を超えるものは出版されていない。その原因は価格が1円50銭と高価であったことによるだろう。これ以降は簡単な1枚刷りの沿線図が主流となり、鉄道の高速化に伴い沿線図は姿を消していくことになる。超特急の車窓の眺めはアツという間に過ぎていく。

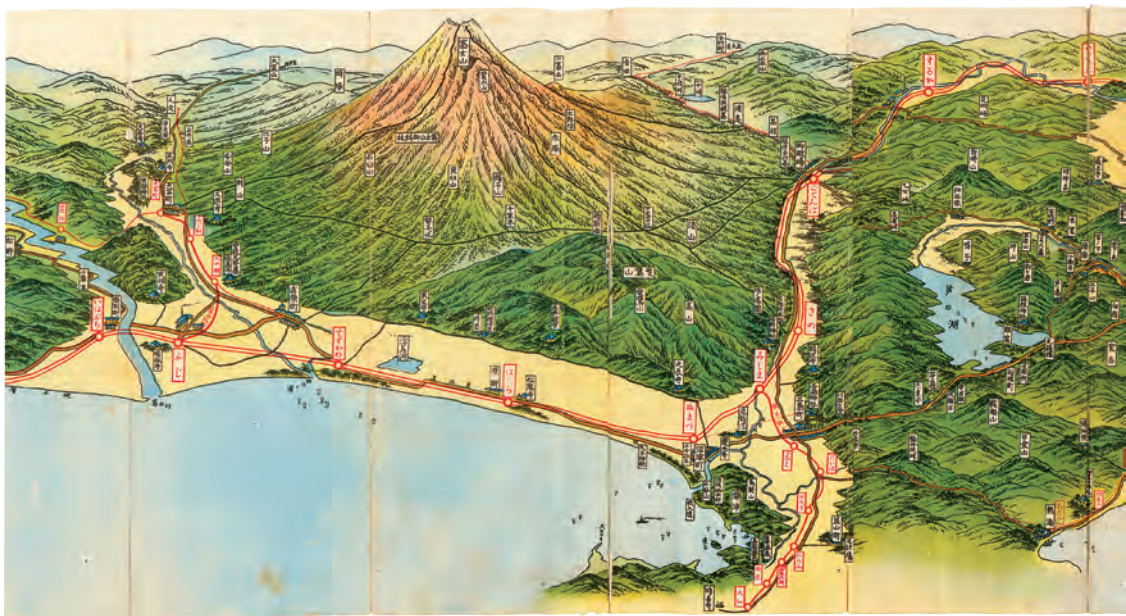


図2 『東海道パノラマ地図』

○

以上の東海道絵図のほかにも多くの絵図が出版されているが、ここでは残念な東海道絵図『江戸道中勝景行程記』を取り上げよう。

『江戸道中…』は宝暦9年(1759)の刊。折本仕立で宝暦以降2度ほど版を重ねているようである。本図の特徴の一つは大阪から始まることである。しかも本図は最初大阪から伊勢神宮への参拝案内書『伊勢道中行程記』として寛延4年(1751)に出版されたものであった。本図は東海道関宿で東海道を離れ、伊勢神宮へ向かう道中の案内書である。このコースは関西からの伊勢参宮の典型的なもので、関宿東詰には伊勢への道が分岐しそこには鳥居が建っている。この鳥居は神宮の式年遷宮の時の古材で作られているということである。ところがこの『伊勢道中行程記』を関宿でカットし、『江戸道中…』を作り上げてしまったのである。

どのような事情で江戸まで行ってしまうかと思ったのか当然不明である。関西人としては、本来東海道の起点でもある関西・京都が、近世には終点というのが気に入らなかったのだろうか。近世においても東国では京に上ると敬意を表しているのに。因みに京都人である秋里籬島が執筆編纂した『東海道名所図会』は京都から始まっている。

『新板東海道分間絵図』が人気を博したことから、よせばいいのにこれに倣って大阪からの



図3-1 「江戸道中勝景行程記」箱根宿

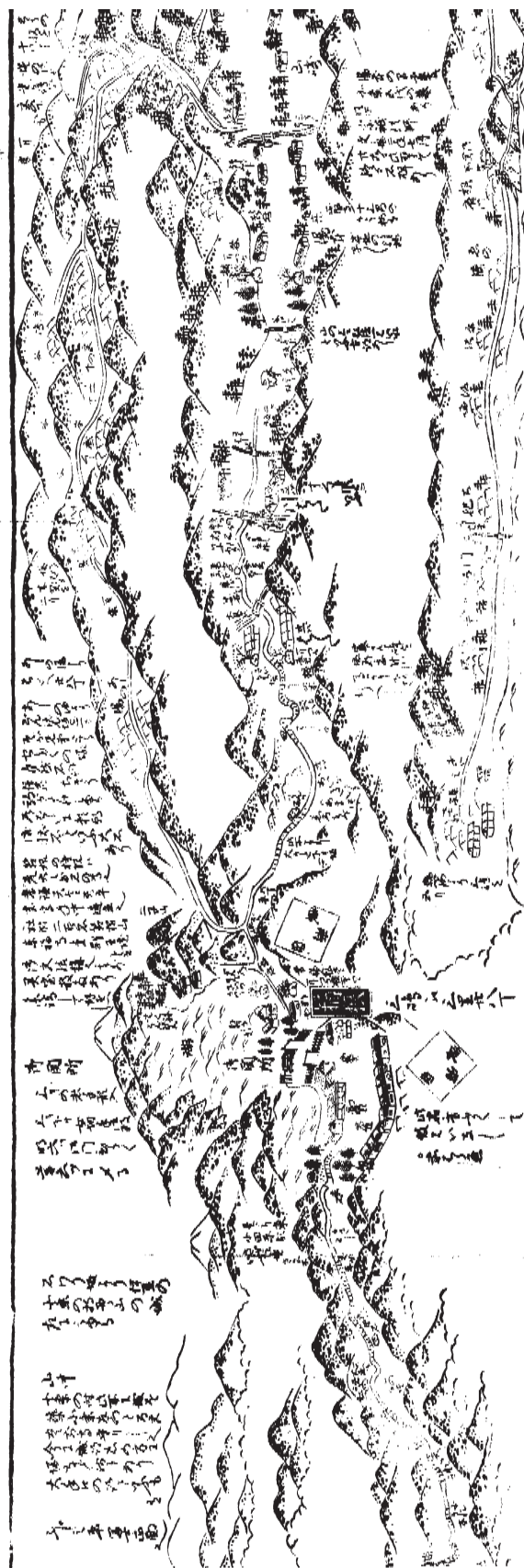


図3-2 「新板東海道分間絵図」箱根宿



図4-1 「江戸道中勝景行程記」戸塚及びび江の島鎌倉道

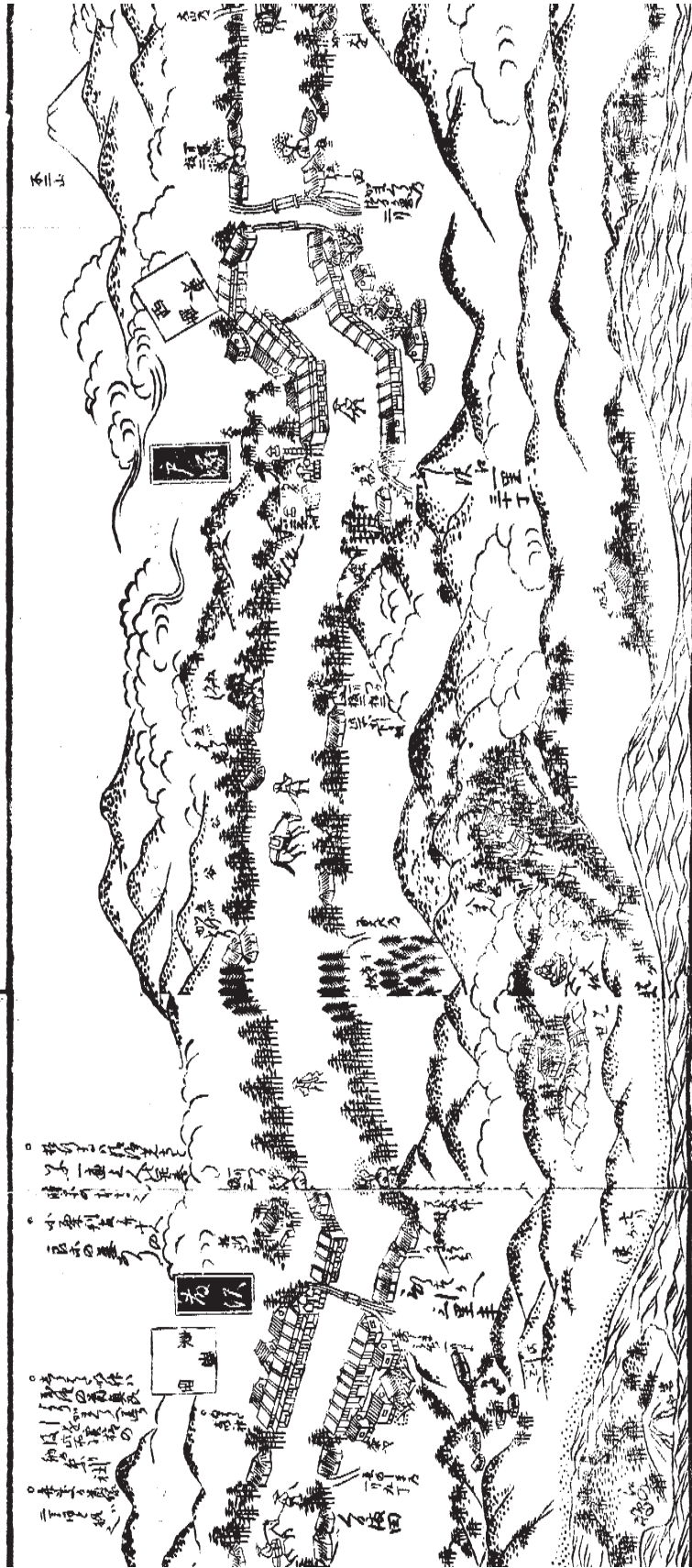


図4-2 『新板東海道分間絵図』 戸塚及び江の島鎌倉道

案内絵図を作りあげてしまったのだろう。

『江戸道中…』の特徴は情報が多すぎること、そしてデザイン？があまりにも下手なことである。両図の場面を幾つか比較してみよう。

まず三島から箱根関所の辺りまで（図3-1）。上の方に描かれているのは小田原から熱海方面に向かう俗称根府川道、下方は東海道である。下方の道は山中を通るため、この図が箱根山中ということが分かっているれば下方が東海道と分かるが、そうでなければ一瞬悩んでしまう。さらに四角囲いの説明文が煩雑に見えてくる。また山であることを強調するつもりと見られる、点々は画面を不明瞭にするだけである。

これに対し『新板東海道分間絵図』は黒地に白抜きで「箱根」とあり一目瞭然である（図3-2）。さらに東海道は道幅広く描かれ、明らかに根府川道とは区別され、説明文は概ね上部に書かれており煩雑さを感じることはない。『新板…』にも山には点々が描かれてはいるが、煩雑さはあまり感じることはない。

次に藤沢辺りから神奈川宿までの辺りを見てみよう。『江戸道中…』は何処が東海道か不明である（図4-1）。特に戸塚から新町（保土ヶ谷）辺りに至ってはお手上げである。一体東海道は何処へ行ってしまったのだろうか。江ノ島・鎌倉への道もあまりにも、よく言えば丁寧に、有態に言えばゴチャゴチャと書き込んだものである。

『新板…』は上部に道幅広く東海道が描かれ、宿場名も白抜きで分かり易い（図4-2）。一方鎌倉・江ノ島への道はあっさりとして描いてあるだけである。鎌倉・江ノ島は江戸・江戸近郊そして伊勢参宮者が多く訪れるところ。詳細な地図や案内など無くても、それこそ人の尻に付いて行けば達することができただろう。

『江戸道中勝景行程記』は東海道中絵図の中でも最も親切で大きなお世話の案内書かもしれない。



『江戸道中勝景行程記』は版を重ねたといっても発行部数は少なかったであろう。これに対し『新板東海道分間絵図』はかなり版を重ね、発行部数も相当の数に上ることであろう。そのため古書市場や古書目録でもよく目にする。

一方『江戸道中勝景行程記』は発行部数が少なかったため滅多に古書市場に姿を見せることはない。そのため出来の悪い本絵図の方が洛陽の紙価を高からしめているのである。何とも皮肉なことである。

情報を簡潔に伝えるというのは難しいことである。詳しくればいいだろう。情報が多ければいいだろう。というのは逆に選択肢を狭めることになる。と言いたいところだが、それは現代では齢を重ねた者の躁言かも知れない。現代の若者……に限らず多くの人はスマホの中にある溢れんばかりの情報の中から巧みに必要な情報を選び出しているようである。

そうそう駅に置いてある住宅情報誌などは情報過多を代表する一つである。話はとんでもない方へと行ってしまいそうである。

（やまもと みつまさ 交通史学会会長）